Nara Women's University

謙譲語再考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学附属中等教育学校 公開日: 2011-04-04 キーワード (Ja): 敬語, 謙譲語, 現代語, 言葉, 古典, 文法 キーワード (En): 作成者: 谷本,文男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/2658

謙譲語再考

谷本　文男

1　はじめに

あるルールを守れない人が多いとします。どうすれば守れるようになるかを考えるのが常道でしょう。そのためには守れない原因を追究することになります。さて、原因が究明できたとして、ルールに無理があるという結論が導かれてしまいました。どうすればいいのでしょうか。何も困ることはありません。実情に合うようにルールを変更すればいいのです。

時代というものはこうして移り変わってきたのだと思います。ある時代のあるルールが絶対などということはあり得ません。

話を大きくしすぎたようです。べつに歴史認識の話をしたいのではなく、私がこれから述べようとすることは、敬語（特に謙譲語）の考え方を少し変えてみようという提案です。

2　高校生を待ち受けるトラップ

初学の高校生が必ずと言っていいほど間違える例を挙げます。例文は『大鏡』の一節です。教科書にも載っている有名なところです。高二で学習するのが普通でしょうから、ここまで学習の進んだ生徒は、この部分については間違えないかもしれません。でもそれはこれまでの学習の中で古典文法の敬語に慣れているからです。

（花山院）花山寺におはしまし着きて、御髪下ろさせたまひて後にそ、粟田殿は、「まかり出でて、大臣にも、変はらぬ姿、いま一度見え、かくと案内申して、必ず参りはべらむ。」と<u>申し</u>たまひければ、「朕をば謀るなりけり。」とてこそ泣かせたまひけれ。

下線部は誰の誰に対する敬意であるかという問いについて、よく見られる間違いは次のようなものです。

「粟田殿の花山院に対する敬意。」

それに対して正しい答えは、次のようなところでしょう。

「粟田殿の動作に謙譲語を用いることによって、間接的に話し手の花山院に対する敬意を表す。」

3　古典文法と現代語文法

なぜ高校生はこの間違いを犯すのでしょうか。主な原因は古典文法と現代語文法における敬語の規定の違いにあります。

(1)　古典文法は解釈のための文法

古典文法の敬語は次のように説明されます。

尊敬語…動作の為手（して）に対する話し手（書き手）の敬意を表す。

謙譲語…動作の受け手に対する話し手（書き手）の敬意を表す。

丁寧語…聞き手に対する話し手（書き手）の敬意を表す。

すべて敬意の出所は「話し手（書き手）」となっています。古典文法は自分が使う文法ではなく、書かれたものを解釈する文法であることを示します。

⑵　現代語文法は使う文法

現代語文法は使う文法なので、敬語の説明にいちいち「話し手（書き手）」は出てきません。

尊敬語…相手の動作・事物に対して敬って言う言葉。

謙譲語…自分（自分の側）の動作・事物をへりくだることで、相手を高め敬う言葉。

丁寧語…あらたまった言葉を用いて、話全体を丁寧にする言い方。

現代の小説で「鈴木係長が、思いあまって佐藤社長に申し上げたそうです。」という表現があったとして、この小説の作者たる作家の、社長に対する敬意を表すと説明するのが正しいでしょうか。社員の社長に対する敬意とするのが妥当でしょう。

逆に、先ほどの『大鏡』の例で、粟田殿の花山院に対する敬意はないと言い切れるでしょうか。ないことの証明は困難を極めます。あるとすれば不都合が生じるという背理法を用いるのでしょうか。私の手には負えません。

4　敬語の統語法

実は、以上は不毛な議論なのです。何が不毛かというと、「誰の」敬意かということを問題にしている点が不毛です。敬語で重要な点は、「誰に」敬意が払われているかであって、「誰の」かは重要ではありません。あるいは、「誰の」かを決めるのは困難な場合があります。敬意が払われるべき人に敬意が払われていればいいのです。その人がそういう存在であることを確認するのが敬語です。

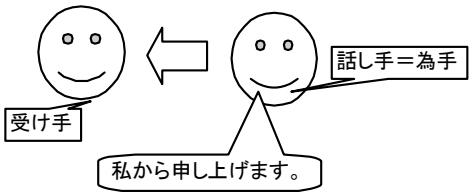
敬語の統語法（英語で言えばシンタックス（syntax）、日本語の文法でこの用語を使うかどうか知らないが仮にこう呼びます）と意味論を混同して論じるからこんなことになります。

謙譲語で重要な点は、動作の受け手が敬意を払われていることです。為手（して）が**謙譲カード**を切ると、受け手に敬意が払われることになります。その際、為手が自らの意思で謙譲カードを切ったか、第三者が為手にカードを切るようしむけたかは、統語法上は問題ではありません。というより、統語法上為手以外に謙譲カードを切ることのできるものはありません。誰の意思によりカードを切ったかは意味論の範疇ですから、場合により異なるでしょう。

以下、いくつかの場面を想定して、謙譲語がどのように用いられているかを考えます。現代語に比して古典の世界の特異性が明らかになるはずです。

5　いくつかの場面

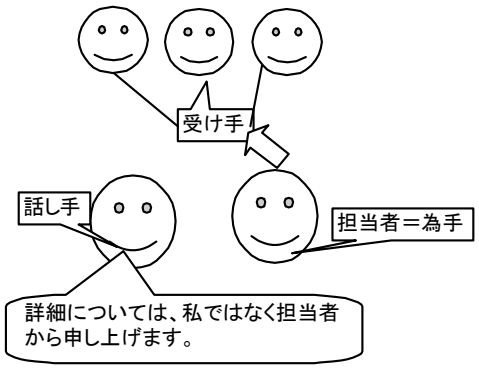
A　現代語で話し手と為手が同じ場合



二人しか登場人物はいません。
当然、この二人は場を共有しています。
自分の動作をへりくだるという例。

話し手と為手が同じですから、議論の余地はありません。話し手＝為手たる私が敬意を払っています。

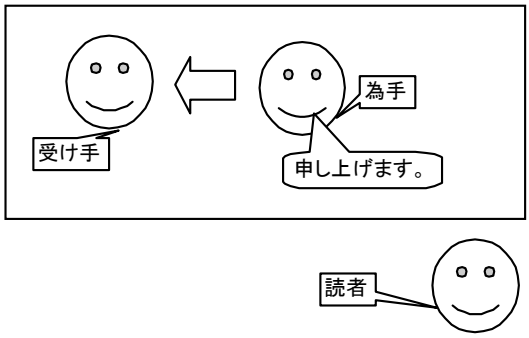
B　現代語で話し手と為手が異なる場合



何かの説明会に担当者とその上司が出席し、初めに上司が挨拶をして、その後聴衆に向かって担当者から説明する旨を告げている。
全員場を共有しています。
自分の側の動作をへりくだる例。

話し手と為手が同じではありません。話し手、為手ともに受け手に敬意を払っていると考えるのが妥当でしょう。

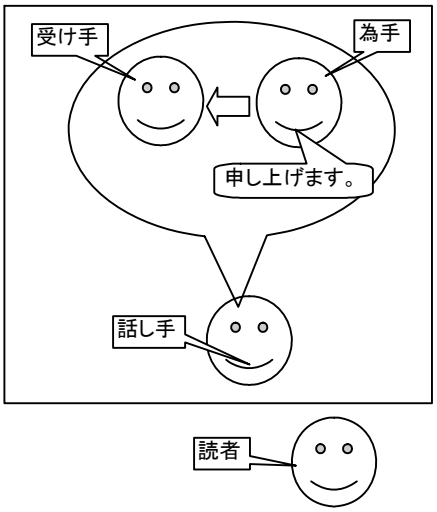
C　現代語で書かれたものを読者が読んでいる場合



小説の一節だとします。
話し手（書き手）は小説家ですが、現代の読者は自分が読んでいる小説の作者を常に意識して読むということはありません。
読者は為手や受け手と場を共有していません。読者が枠の外にいるのはそのことを示しています。

為手が受け手に敬意を払っていると考えるのが普通でしょう。
ここで話し手（書き手）の存在を持ち出してくる読み方は一般的ではありません。

D　古典を現代のわれわれが読んでいる場合



昔のことを現代の私達が読んでいるのですから、読者は誰とも場を共有していません。読者が枠の外にいるのはそのことを示しています。

現代語とは異なり、常に話し手（書き手)）を意識しなければならないとされています。
敬意は常に話し手（書き手）から払われていると考えることになっています。
高校生にこのようなメタ読み（仮にこう名付けます）を強いるのは正気の沙汰とは思えません。

6　謙譲語の定義を提案する

再度強調します。謙譲語は受け手に敬意が払われていることを確認できれば十分です。誰の敬意かは問題ではありません。

次のように定義すれば、現代語・古典両方に通用するでしょう。

謙譲語…為手の動作に用いることによって、動作の受け手に対して敬意が払われていることを示す。